生きんとて

―倉田百三とその弟子―

浅田　晃彦

近代文藝社

生きんとて

―倉田百三とその弟子

浅田　晃彦

近代文藝社

生きんとて——倉田百三とその弟子——

1992年6月30日　第1刷

著　者　浅田　晃彦（あさだ・てるひこ）
発行者　福澤　英敏
発行所　㈱近代文藝社
〒112 東京都文京区目白台2-13-2
(03)3942-0869 郵便振替 東京7-68875
定　価　1,800円（本体1,748円）
印　刷　信毎書籍印刷株式会社
製　本　小泉製本所
©Teruhiko Asada 1992 Printed in Japan
ISBN 4-7733-1650-0　C0095　P1800E

まえがき

倉田百三は『出家とその弟子』『愛と認識との出発』の作者である。大正から昭和初期にかけて青年期を過ごした者でこの名を知らぬ者はおるまい。人間形成のうえで大きな影響を受けた者が少なくないであろう。そこに語られている純粋で真摯な思索、宗教への渇仰と人道主義への傾倒は生きて行く心の灯であった。百三は青年の苦悩を背負った求道者であり、慰めと励ましを与える先達であった。

ところがこの二著作に心酔した者が後年の著作を追い求めると、意外な変身に突き当たり、失望や落胆を味わわされる。『祖国への愛と認識』『日本主義文化宣言』などに見る百三はかっての悩める求道者の姿勢を一擲し、信念に燃え折伏の気を吐く説法者となっている。説くところは八紘一宇の民族的使命、全体主義的国家主義の鼓吹、自由主義民主主義の否定である。要するに日本の大陸政策、東亜新秩序の建設のために理論を展開しているのである。理論というより神がかりな託宣とも思われる。

無論第二次大戦前の情勢下に、大陸政策を批判したり戦争反対を主張するのは至難な業であった。百三がそれをしなかったからと言って非難するのは当たらない。だが時流の先頭に立って論陣を張ったとは慨嘆せざるを得ないのである。

ロマン・ローランは『出家とその弟子』を「世界最高の宗教文学」と絶賛した。だが日中開戦以来の百三の仕事を高く評価する者はいない。権威におもねり、右翼に利用され、柄にもない役目を自分に課す誤りを犯した、というのが一般の見方である。

だが果たして百三は晩節を汚したのだろうか。あの狂瀾の時代に書斎に籠もり、祖国の動向にただ胸を痛めているべきだったろうか。思索から行動に駆り立てたものは何であったろうか。

私はこの小説で百三の悲願を明かにしたかった。その晩年に師事した者の一人として記録しておきたいのである。そしてその中に弟子たちの青春像を造形してみたかった。題名の「生きんとて」は昭和十四年に百三が始めた会合である。会の趣旨は生の根本問題を時局に即して考えていくことだった。当時日本は大陸進出の泥沼にはまりこんでおり、私たちはやがて戦争に駆り出される青年としてどんな覚悟を持つべきかに迷っていた。また私は慶応医学部の苦学生で、授業料滞納のため退学を迫られていた。満州国の委託生になれば解決するが、金だけが目当てで志願することは出来ない。満州国は「日本の生命線」であり「五族協和、王道楽土」を理想として建てられた国だが、そこに生きがいを見出せるかどうか不安であった。そんな状況に生きる心の支柱をこの会に求めたのである。

以後の経過は小説を読んで頂くことにする。結局私は百三の心酔者にはなれなかった。先生と呼んでいたが、弟子と言い得るかどうか。それでも大陸雄飛を決意したことには、百三の影響が大いにあったと思う。今回想すると気恥ずかしいが、私は歴史を創り出す事業に参加する自負に胸を張っていたのである。結局夢に終ったことだが、そういう青春を持ったことに悔いはない。

私は百三が晩節を汚したとは思っていない。その所説が現代に価値あるものとは言えないが、とにかく現実の時勢を真剣に憂慮していたのである。当時の知識階級が保身のために沈黙を守った中で、百三は良心的であったために国策を理論づけ正当化せずにはいられなかった。それは祖国への愛から溢れ出たもので、生きんとての会によって次代を担う新知識階級の養成に、病弱な肉体を倒れるまで駆使したのである。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

生きんとて　目次

まえがき
一　三人の苦学生……7
二　生きんとての会……25
三　看護婦と女子大生……37
四　祖国への愛と認識……48
五　文学の使命……61
六　新知識階級とは……74
七　武蔵野ハイキング……88
八　百三と女弟子……99
九　日本主義文化宣言……114
十　大陸雄飛の憧れ……126

十一　玄界灘の黙示……138
十二　皇紀二千六百年……150
十三　死神の足の垢……163
十四　国づくりの仕事……176
十五　選ばれた人……191
十六　ナチスドイツに学ぶ……201
十七　骨を埋める土地……213
十八　勇敢なる水兵の歌……225
十九　興亜学生勤労報国隊……238
二十　揺れる羅針盤……250
あとがき
著者略歴

生きんとて

――倉田百三とその弟子――

一　三人の苦学生

まずい飯である。しかし値段が二十銭なのだから不平は言えない。街の食堂へ行けば四、五十銭とられる。学生食堂に来るのはその金のない連中だった。

まずいけれどもここでは飯が腹いっぱい食える。それが学生食堂の魅力だった。二十銭払って調理室のカウンターからお菜（おかず）の皿を受け取る。お菜はイカやカレイの煮付、コロッケやシューマイなどである。そのどれかを選んで、セルフサービスでテーブルに運ぶ。テーブルのそこここに飯櫃と茶碗が配置してあり、手盛りで何杯食ってもいい。若い胃袋にとってこれはありがたいことだった。

ロハで済ます方法もあった。カウンターの小母さんの眼をかすめてお菜を買わずに潜りこみ、飯だけ食って来るのである。テーブルにはソースが出ているから、それを飯にぶっかけて食う。学生たちはこれをソースライスと呼んで、金のない時にはこの手を用いた。

食堂の中央に太い柱があって、小母さんの目に死角を作っている。この小さな犯罪を行なうにはこの死角を利用して席を占めるのがいい。そして素早く食ってしまうことである。

その日荒畑次郎はソースライスを食っていた。彼にとって二十銭は大きな金だった。一回ごまかせばノートが一冊買えるのである。

荒畑は苦学生だった。現在医学部の二年生である。

慶応大学はお坊ちゃん学校と呼ばれており、裕福な家庭の子弟が多い。従って苦学生は珍しか

った。特に医学部は勉強が忙しく授業料が高いので、苦学で卒業するのは不可能に近い。それを荒畑は頑張っていた。家庭教師を二軒、一軒は住みこみで朝夕の食事付き、一軒は週二回の通いで給料二十円、この報酬でどうにか学生生活を続けてきた。だが授業料を完納するまでには行かない。すでに二百円近くの滞納があり、事務局から退学処分の警告を受けている状態だった。

荒畑の肩を小突く者があった。

「またやってるな」

ギョッとしてふり向くと、同級生の栗原伊作が立っていた。

「済んだら席を譲れよ」

栗原は荒畑を邪険に押しのけ、死角に隠れてソースライスを食い始めた。

栗原も苦学生だった。しかも筋金入りというべきベテランだった。秋田県の田舎の中学を卒業すると裸一貫で上京し、二年の浪人時代を経て現在まで六年間も独力でやって来たのである。その間いろいろな仕事を経験して来たが、数年前から新聞の〈拡張〉をやっている。拡張とは購読者募集の仕事で、熱心にやれば月に五、六十円の収入をあげられるという。だが栗原は最近あまり熱心でなく、いよいよ金がなくならなければ働かなかった。だから昼飯もソースライスで済ましさねばならなくなるのである。

荒畑の苦学は予科三年の時から始まった。群馬県の山奥の寺の住職だった父が急死したためである。もともと貧乏寺で、息子を大学へ出すほどの収入はないのだが、荒畑の成績が良かったので無理算段してきたのである。死後かなりな借金が発見された。少しばかりあった生命保険金はその穴埋めに消えてしまった。本山へ修行に行っていた兄が帰って寺を継いだが、他に三人も妹や弟がいることとて、荒畑への仕送りは不可能となった。退学して村の代用教員にでもなるしか

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

ないか――と一時は覚悟を決めたが、その時苦学を通している栗原が先達になった。僕にだってやれないことはない――と同じ道を行けるところまで行く決心をしたのだった。

「お前、二十銭持っていねえのか」

栗原は二杯目をクチャクチャ噛みながら、さげすむような目を荒畑に向けた。

「そういう君はどうなんだい」

「俺は食欲なんぞ軽蔑しているよ。軽蔑しているものに金は払わねえ」

「傲慢な奴だな。まあ今のうちにうんと食っておけ。そのうちに食えなくなるぞ。米穀統制で米が切符制になるんだ。現に他の学校では学生食堂が閉鎖し始めているよ。このお櫃もじきにカウンターの向こうに引っこんでしまうぞ」

荒畑の言葉に栗原は度の強い眼鏡の中の目を剝いた。

「まさか。医学部の食堂はそんなことにはならねえさ。この米は入院患者用として買ってるんだからな」

「それが厳しく統制されるんだよ。入院患者も外食券を出さなけりゃ食えなくなるんだ」

「ほんとかい。豊葦原の瑞穂の国が支那を相手の戦争でそんなザマになるのかい」

「支那だけが相手じゃない。イギリスが後ろにいる。その後ろにアメリカがいる。だから蔣介石の息の根がとめられないんだ。戦争は長期化する傾向にある。労働人口を大陸に送り出しているんだから、国内の生活物資が逼迫するのは当然だ」

「しかし戦争は勝っているんだろう。勝っているんなら何かその恩恵がありそうなもんじゃないか。贅沢は敵だ、耐乏生活だ、と締め上げるばかりなんだからな。これじゃ張り合いがねえよ。俺の商売もやりにくくなった。新聞は一種類取ればいい、と言って断りゃがるんだ」

栗原は口の中の茶ガラをペッと吐き出した。苦学がやりにくくなったことは荒畑も同じだった。
「僕は陸軍へ願書を出したよ」
荒畑は告白するように言った。
「出した？　とうとう身売りに決めたのか」
「願書だけ出して置いたのさ。受験するかどうかまだはっきり決めてないんだ」
学部二年になると陸海軍の委託医学生を受験できた。合格すれば毎月四十円の給費が受けられる。卒業後軍医として奉職しなければならない義務があるが、貧乏学生にとってはありがたい制度だった。
「四十円やそこらの金で自分の将来を束縛するのか。軍医なんてつまらんじゃないか。滅私奉公で一生終えるんだぜ。戦地へ出されればいつ弾丸に当たるか分かりゃしねえ。俺は軍医になるくらいなら、医者になることをやめてしまうよ」
栗原は吐き出すように言った。徹底した軍人嫌いなのだ。学校教練にもほとんど出席していない。
荒畑も軍医が自分に適しているとは思っていない。栗原ほどではないが、軍人は嫌いである。しかし家庭教師の口を失った場合、委託生にでもならなければ学校が続けられないのである。
栗原は〈滅私奉公〉を軽蔑している。確かに自分を最大限に生かすことが人生の使命であろう。だが、自分を生かす事は〈奉公〉と背反することなのか。荒畑にはそれが解らなくなっていた。
栗原の夢は留学生試験を受けてパリへ行くことである。その準備に苦学生の身でアテネフランセへ通っている。医学生は会話にドイツ語を混じえて話すが、栗原はフランス語を混じえる。そして相手が目を白黒させるのを見て愉快がった。そういうことによって裕福な級友たちに対する

劣等感を慰めているらしい。パリの地図をポケットに入れており、ヴェルレーヌの詩をフランス語で口ずさんでいる。

食堂のラジオがニュースを放送し始めた。ドイツがイタリアと軍事同盟を結んだという。ヒットラーとムッソリーニが協力してフランスとイギリスを抑圧しようというのであろう。すでにドイツはオーストリアを併合し、チェコスロバキアを保護国とした。イタリアもアルバニアを併合した。これを英仏が容認するはずがない。ヨーロッパにも戦争が起こりそうな気配である。

「出よう」

と栗原は席を立った。

「戦争のニュースなんぞ聞きたくねえ。俺は戦争は嫌いだ。戦争をする軍人も嫌いだし、軍人を治療する軍医も嫌いだ」

「嫌いでは済まされないぞ」

荒畑はむっとして言った。

「現に戦争は行なわれているんだ」

「やりたい奴にやらせておけばいいさ。俺はご免こうむる」

「そうはいかんぞ。ヨーロッパに戦争が起これば、君のフランス留学も不可能になるぞ」

「フランスは戦争なんかしねえよ」栗原は断言した。「実は俺もそれが心配で、フランス大使館に問い合わせたんだ。そしたら来年も留学生を採ると言ったぞ」

「来年は採っても再来年はどうかな。君が卒業するのは三年後だ。それまでにこの情勢がどう変わるかだ。僕は世界が二つに割れるんじゃないかって気がするよ。勿論フランスは向う側だ」

荒畑は意地悪く言った。

「僕はフランスの理性を信じるよ」
栗原は昂然と言ったが、その声は弱かった。時代がそのように動いていることは否定できない事実なのである。
「出ようよ」
栗原は再び促した。食堂はガランとしていた。二人はカウンターの前を悠然と通った。二十銭払った顔で。
足が自然と神宮外苑の方に向いた。省線電車が走っている谷の陸橋を渡ると、すぐそこに新緑に包まれた外苑が静かな空気を漂わせていた。イチョウの稚葉は絵具のチューブから押し出したままのようなエメラルドグリーン。ケヤキの稚葉は煙ったような紅さ。よく晴れた空にアドバルーンが浮いていた。〈パーマネントはやめましょう〉という文字が読める。行き会う娘達の服装がこのごろめっきり地味になっていた。
「いやな時代だなあ。俺達はつまらねえ時代に、つまらねえ国に生まれちゃったんだぜ」
栗原がソースライスのおくびを吐きながら呟いた。荒畑もおくびを吐きながら、反抗するように言った。
「そうかも知れないが、僕はそう思いたくないな。歎いたって仕様がない。与えられたこの状況の中で生きることを考えなくちゃ」
「そりゃ、そうさ。俺だって負けやしねえよ。しかし、暗いなあ。希望がねえなあ。苦労して学校を卒業しても、俺達を待っているものは……」
栗原は口をつぐんだ。いつになく弱気な言葉である。荒畑も黙って歩いた。委託生に合格すれば卒業の見込みは立つ。だが、軍医としての勤務に情熱が持てるだろうか。

栗原が突然独り言のように言った。
「俺、ゆうべ童貞を捨てて来たよ」
「えッ――」
荒畑は足を停めてその顔をのぞいた。
「どうしてだ？」
「荷物になったからさ」
栗原はそのまま歩き続けた。
「相手は誰だ」
「名もなき夜の女さ。二円五十銭で買ったんだ」
栗原は何でもないことのように言ったが、こわ張った表情から相当な動揺を受けていることが感じられた。その負担に耐えきれなくて告白したのであろう。
「女って不潔なもんだな。初めは美しさに見とれたよ。こんな美しいものを金で自由にしていいのかと思った。ところが、後ではけがらわしくなった。これが長い間憧れていたものかとがっかりしたよ。あんな所へ行くもんじゃねえぞ」
「当たり前だ。そんなこと考えてみりゃ分るじゃないか」
荒畑は嚙みつくように言った。栗原の先輩ぶった物言いがしゃくにさわった。
栗原はどういう理由で捨てる気になったのか。この荷物に全く価値を認めなくなったのか。
芝生がふっくらとしたじゅうたんをひろげていた。栗原はその上に腰を下ろし、仰向けに倒れた。ようかん色に変色した制服。ひび割れた靴。痩せた身体は横になるとひどく薄く見える。眼鏡が白く光っている。

荒畑も腰を下ろし、膝をかかえた。まだ栗原の告白にこだわっていた。栗原が不潔に見えた。だが、憎むこともできなかった。

「淋しいなあ――」

栗原はバットの煙を吹き上げながら呻くように言った。

青山一丁目の方から同級生の柿本俊太郎が歩いて来た。上下動の激しい独特な歩き方である。いつもは体操のように両手を振るのだが、今日はその手がポケットに入っていた。何か考えことをしているらしい。

荒畑は柿本が午前の講義に欠席していた事を思い出した。

「柿本が来たよ」

というと栗原はむっくり起き上がった。

「うん、柿本だ。あいつどうしたのかな。今ごろ出て来るなんて」

「なんだか深刻な顔をしているじゃないか」

近づいて来た柿本に栗原が声をかけた。

「おい、どうしたんだ。人類の不幸を背負っているような顔だぞ」

例によって揶揄、それが栗原の親愛の表現なのである。柿本は立ちどまって二人の顔を見回し、にこりともせずに言った。

「講義の時間だぞ。出ないのか」

「もうそんな時間か」

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com